著者略歴

鏡味國彦（かがみくにひこ）

昭和13年8月　名古屋市に生まれる
昭和39年3月　立教大学大学院修士課程（英米文学専攻）修了
昭和43年3月　立正大学大学院博士課程（英文学専攻）修了
現　　在　立正大学文学部教授・東京経済大学講師
現代英文学・比較文学専攻
著書に『現代英米小説論』（共著，栄光出版），
訳書にコンラッド『青春・無政府主義者』（共訳，
文化書房博文社），『ロレンス名作集』（同）他。

ジェイムズ・ジョイスと日本の文壇　　定価 2,500

昭和58年5月20日　初版発行

著者　鏡味國彦

発行者　鈴木貞義

発行所　**（株）文化書房博文社**
〒112 東京都文京区目白台1-9-9
振替　東京 8－86955
電話　03（947）2034

© 3095－61480－7361

印刷　昭和工業写真印刷所
製本　風林社　塚越製本

ジェイムズ・ジョイスと日本の文壇

―昭和初期を中心として―

はじめに

周知のようにイギリス文壇では第一次大戦直後に「意識の流れ」の小説があいついで書かれ、読書界に大きな衝撃を与えた。「意識の流れ」という語の出典は、アメリカの小説家ヘンリィ・ジェイムズ（Henry James,1843—1916）の兄で心理学者・哲学者のウイリアム・ジェイムズ（William James,1842—1910）の主著『心理学原論』*The Principles of Psychology*（1890）である。その要点は、人間の意識は一瞬一瞬のうちに多様な流動、変化をつづけ、決して同じ意識内容に戻るものではないが、にもかかわらず、連続的意識作用として認識される、という考察にある。人間の内面で複雑に屈折するこの「意識の流れ」を「内的独白」という文学上の手法と重ね合わせたのが、ジェイムズ・ジョイス（James Joyce,1882—1941）、ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf,1882—1941）、ドロシイ・リチャードソン（Dorothy Richardson,1882—1957）であった。

それでは「意識の流れ」小説は、どのような状況の下に生まれたのであろうか。そのもっとも大きな原因は、言うまでもなく、第一次大戦という空前の大規模な戦争であった。大戦はヒューム（T・E・Hulme,1893—1917）やルパート・ブルック（Rupert Brooke,1887—1915）、オーエン（Wilfred Owen,1893—1918）らイギリスの有能な青年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文学者の死を招いたばかりか、すでに世紀末に見られた不安と絶望が、いっそう実感となってのしかかり、精神の荒廃、価値観の崩壊、反伝統的意識を急速にうながすことになった。しかも、この現象はイギリスも含め全ヨーロッパに拡大していった。

また、こうした状況に合わせて、オーストリアの精神病理学者フロイト（Sigmund Freud,1859—1939）の『夢の解釈』*Die Traumdeutung*（1900,英訳版 *The Interpretation of Dreams*,1911）に始まる精神分析学の新しい理論は、大戦後の文学に絶大な影響を与えた。その結果、小説の方法が、伝統的な外面描写の方法、自然主義的リアリズムの方法から一転して、心理や意識の深層にメスを入れ、「意識の流れ」を追求する心理的傾向に向かったのは、云わば、必然的動向であったと言えよう。こうした新しい文学の推進者、飽くことを知らぬ実験者がジョイスだった。そして、ジョイスの代表作『ユリシーズ』*Ulysses*（1922）が発表されるやその影響は、たちまち欧米に広まったばかりでなく、遠く海を越えて日本にも及ぶ。そして昭和初年代の文壇に「新心理主義文学」とか「意識の流れ」派とかいう呼称が広まり、ジョイスの手法による小説が数多く書かれた。

本書の目的は、昭和初期の日本にジョイスがどのように移入され、日本の作家にどのような感化を及ぼしたかを考察することにある。

なお、小著を執筆するに際して、貴重な資料や助言を賜わった立正大学文学部の齋藤襄治教授に厚くお礼を申し上げたい。また、出版に尽力下さった文化書房博文社の

鈴木貞義社長、同社編集部の天野義夫氏に感謝の意を表したい。

昭和五十八年四月

鏡味國彦

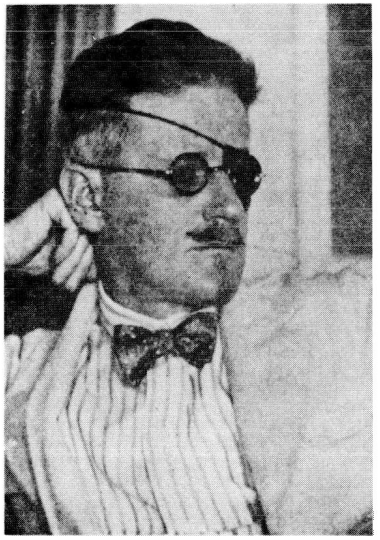
目次

はじめに
第一章　大正期から昭和初年代にかけてのジョイス紹介の概観……九
第二章　伊藤整のジョイス受容(一)……三九
第三章　永松定とジョイス……六三
第四章　春山行夫とジョイス……七九
第五章　川端康成とジョイス……一〇一
第六章　伊藤整のジョイス受容(二)……一二三
第七章　阿部知二の主知的文学論と新心理主義文学……一四五
第八章　西脇順三郎とジョイス……一九一

第一章　大正期から昭和初年代にかけてのジョイス紹介の概観

永松定は、昭和六年四月に発表した「日本に於ける『意識の流れ』小説」で次のように記している。

わたくしの知る限りでは日本に於ける最初のジョイス紹介者は土居光知氏である。昭和四年二月の『改造』に於て氏は『ユリシイズ』に就いて詳細に亘つて紹介してをられる。次に筆者が『風車』、『文藝レビユウ』並びに『文學』等に、それぞれ紹介及び飜譯した。『文學』には創刊號以來淀野隆三氏等のプルウストの日本語譯が掲載された。それと同じ頃『詩と詩論』第五



ジェイムズ・ジョイスの肖像

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

冊にスチユアート・ギルバアト、ジユリアン・グリインの『ユリシイズ』論を辻野久憲氏が譯載された。

昭和四年(ママ)(五年の誤り—鏡味)六月『詩・現實』創刊號に於て伊藤整氏が『ジエムズ・ジョイスのメトオド「意識の流れ」に就て』なるエツセイを發表した。『詩・現實』では第二號以下、辻野久憲、伊藤整、永松定共譯の『ユリジイズ』が掲載されつつある。『詩と詩論別冊』、現代英文學評論に、伊藤整氏のジエムズ・ジョイス抄、葛川篤譯、ヴアジニア・ウルフの『時は流れゆく』が載せられた。『新科學的』に永松定がジョイスの『若き藝術家の肖像』の抄譯を発表した。わたくしは昭和六年一月『新文學研究』の發刊のことは何も言ふまい。(1)

永松定が述べているように、昭和四年二月に発表された土居光知の論文を契機に、昭和八年頃まで、いわゆるジェイムズ・ジョイス(James Joyce,1882—1941)ブームが巻き起こる。しかし、最初のジョイス紹介者は、永松のいう土居光知ではない。ジョイスが日本に紹介されたのは意外に早い。太田三郎によれば、最初のジョイス文献は、詩人ヨネ・ノグチ(野口米次郎)が、大正七年三月の『学鐙』に掲載した「画家の肖像」であり、これはジョイスの『若き日の芸術家の肖像』*A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) を紹介し、その文体の特徴を指摘したものである。

次にジョイスに注目したのは芥川龍之介である。彼は「『我鬼窟日録』より」(大正八

年五、六月の日記）に次のように記している。

六月十八日　雨

姉、弟、細君、「ワニヤ」見物。紫陽花を澤山剪つて瓶にさす。橋場のどこか別荘に紫陽花が澤山咲いてゐたのを思ひ出す。丸善より本來る。コンラッド二、ジョイス二。(2)

芥川は、一つの事件を数人の人物に語らせて、めいめいの心理を解剖して読者に示す、いわゆる多角的視点の上に立った「藪の中」（大正一一年）のような特異な形式の作品を書いているが、同じような手法を用いて『ロード・ジム』*Lord Jim*（1900）や『運命』*Chance*（1913）を書いたジョゼフ・コンラッド（Joseph Conrad,1857—1924）に関心を持ったのはごく当然のことであろうし、「藪の中」を書くに際してコンラッドの作品を念頭に置いていたかもしれない。それはさておき、上記の引用文中の「ジョイス二」のうちの一冊は、『雑筆』のなかの「小供」という項（大正九年八月二〇日付）から『若き日の芸術家の肖像』（以下『肖像』と略す）であることが判明する。その全文は次の通りである。

小供の時分の事を書きたる小説はいろいろあり、されど小供が感じた通りに書い

たものは少なし。大抵は大人が小供の時を回顧して書いたと云ふ調子なり。その點ではJames Joyceが新機軸を出したと云ふべし。

ジョイスのA Portrait of the Artist as a Young Manは、如何にも小供が感じた通りに書いたといふ風なり。或は感じた通りに書き候と云ふ氣味があるかも知れず。されど珍品は珍品なり。こんな文章を書く人は外に一人もあるまい。讀んで好い事をしたりと思ふ。(3)

この短い一文からも芥川が、ジョイスの『肖像』にみられる心理描写、とりわけ幼少時代の主人公スティーヴン・ディーダラス（Stephen Dedalus）の心理描写の特色を的確にとらえていることがわかる。

芥川がこの文章を書いた時には、まだ『ユリシーズ』*Ulysses*（1922）は出版されていなかった。したがって、彼が丸善から買ったあとの一冊が何であるかはさだかでないが、抒情詩集『室内楽』*Chamber Music*（1907）か、短編小説集『ダブリンの人々』*Dubliners*（1914）、あるいは戯曲『亡命者たち』*Exiles*（1918）のいずれかであろう。なお、芥川には大正一一年頃と推定される『肖像』のごく一部の翻訳がある。このことからも芥川がジョイスに強い関心を抱いていたことがうかがえる。

ちなみに芥川の訳文の一部と原文を引いておく。

自習室に坐つたまま、彼は机の蓋をあけた。さうして中に貼つてある番號を、七十七番から七十六番に取り換へた。しかしクリスマスの休暇はまだずつと遠い。しかし何時かは來るに違ひない。地球は始終廻転してゐるから。……

彼は地理の書をあけて、勉強にとりかかつた。しかし彼は亞米利加の地名を覺える事が出來なかつた。それでもそれらはそれぞれ違つた名前のある、みんな違つた場所であつた。それらはみんな違つた國にあり、その國々はいろいろな大陸にあり、大陸は世界の中にあり、世界は宇宙の中にあつた。(4)

(Sitting in the study hall he opened the lid of his desk and changed the number pasted up inside from seventyseven to seventysix. But the Christmas vacation was very far away ; but one time it would come because the earth moved round away ....

He opened the geography to study the lesson ; but he could not learn the names of places in America. Still they were all different places that had different names. They were all in different countries and the countries were in continents and the continents were in the world and the world was in the universe.(5))

ジョイスの『肖像』は、主人公スティーヴン・ディーダラスの幼年時代から青年に至る、精神的発展、自我の生長を跡づけたものであり、全体的に見て印象主義的な表

現をとり、ジョイスは、作家が全知なる神として顔を出す伝統的な物語性を排除して、主人公の意識に映るイメージを積み重ねることによって、その精神的発展を内面から描いている。

芥川の晩年の作品、例えば「大導寺信輔の半生—或精神的風景畫」(大正一四)、「追憶」(昭二)などを読むと、『肖像』の影響ないしは感化が考えられる。

「大導寺信輔の半生」は、主人公の幼年時代から青年までの、「追憶」は、〈僕〉の四歳から中学時代までの精神の発展を、記憶に残るイメージを年代順に重ね合わせることによって跡づけている。このように芥川のこれらの作品は、彼がごく一部とはいえ翻訳まで試みている『肖像』の世界と決して無縁だとは言えない。

さて、大正一四年には、詩人堀口大学が『新潮』に「小説の新形式としての『内心独白』」を書いて、わが国に初めて『ユリシーズ』を紹介する。『ユリシーズ』がパリのシェイクスピア書店から出版されて三年後のことである。「内心独白」とは、フランス語の"monologue intérieur"の訳語で、「意識の流れ」を表現する文学技法「内的独白」のことである。

堀口大学はこの論文で先ず、『ユリシーズ』が発表されるや、そこに用いられている「内心独白」の形式が欧米の若者たちの賞讃を買って、多くの模倣者を生み出したことを伝え、その理由を、「内心独白」によるならば、心中の最も奥深いところに束の間に起伏する思念、すなわち意識下の生まれては消えるその場かぎりの思念の動きをあ

りのままに、手っ取り早く表現する可能性が文学に与えられるからだ、とした。更に堀口は、

このやうに、作家をして人心の奥祕にまで下りて行つて、其所に湧き出るあらゆる思念を、意識の感化を受けぬ以前にそのありのまゝの姿に捕へることを可能ならしめるやうな形式「内心獨白」が何ごとに於ても、自然に出來るだけ肉迫しようと欲して制作してゐる作家達の滿足を買ふに到つたことは極めて當然なことだと云はねばならぬ。(6)

と述べ、次いでジョイス自身の告白として、彼の用いた「内心独白」の形式はフランスの象徴派の作家エドワール・デュジャルダン（Édouard Dujardin,1861—1949）の小説『月桂樹は切られた』*Les Lauriers sont coupés*（1887）に由来していることを指摘し、「内心独白」の特徴を次のように論じている。

それが、作中人物と讀者との間の介在人物を全然無用にして、二者の間に直接な交渉を持たせることにある。つまり讀者は作中人物と一心同體になつて、彼の腦裏に入る可く餘儀なくされるのである。要するに正確の意味に於ける物語がなくなつて、讀者の前には走馬燈のやうに、主人公の回想、聯想、慾望、悔恨、希望等あら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com